

一 次の各問いに答えなさい。

問一 次の――線部の、漢字は読みをひらがなで書き、カタカナは漢字に直して書きなさい。

- ① 友だちの家に長居をしてしまった。
- ② その問題は容易に解決できる。
- ③ 妹と二人で留守番をする。
- ④ 雪国では厳しい寒さにたえている。
- ⑤ 郵便物には消印が押されている。
- ⑥ ジョウギを使って線を引く。
- ⑦ 今月のナカバに旅行に行く。
- ⑧ 落ちていたゴミをヒロってゴミ箱に入れた。
- ⑨ 将来は人工エイセイの開発をしたい。
- ⑩ 先生のロウドクを聞く。

問二 次の漢字について、①部首名をひらがなで書きなさい。また、②総画数が同じ漢字をあとのア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

然

ア 派 イ 限 ウ 塩 エ 答

問三 次のア～オの四字熟語の組み合わせの中で、上と下の□に同じ漢字が入るものを二つ選び、記号で答えなさい。

- ア □ 地無用 — 急 □ 直下
イ 不言 □ 行 — 有名無 □
ウ 自 □ 白賛 — □ 竜点晴
エ 半 □ 半疑 — □ 機一転
オ □ 離滅裂 — 終 □ 一貫

問四 次の熟語と組み立てが同じ熟語を、あとのア～カから一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ① 着席 ② 鉄棒
ア 登山 イ 店員 ウ 国営 エ 前後 オ 寒冷 カ 未知

問五 次の文を単語に分けた場合、七番目にあたる単語を、ぬき出して書きなさい。

- ・雨上がりには思ったとおりきれいな虹がかかった。

問六 次の文の——線部が修飾している文節を、ぬき出して書きなさい。

- ・明日はやはり親戚の家に行くのはやめると母が言っていた。

問七 次のア～エから、言葉の使い方が正しいものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 急に友だちが来て、家は上へ下への大騒ぎだった。
イ あの人はご両親が手塩にかけたお嬢さんだ。
ウ 彼は冷静で、意見はいつも的を得ている。
エ 母に何度も注意されて、思わず耳をそむけた。

問八 次の文の「ようだ」と同じ意味・用法で「ようだ」が用いられている文を、あとのア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ・このケーキはふわふわで雪のようだ。
ア 昨日家にたずねてきたのはおじさんのようだ。
イ 明日は雨になるようだ。
ウ 彼女は明るくてひまわりのようだ。
エ 今食べている干物は少し塩辛いようだね。

【二】 次の文章を読んで、あとの各問いに答えなさい。問いの中で字数に指定のあるときは、特に指示がないかぎり、句読点や符号もその字数に含めます。

何を美しいと感じるかは個人差があります。しかし、日本人には、共通した「美しさに対する普遍的な価値観」がある、と私は思っています。それは、西洋の価値観とはまったくちがっています。

西洋の美に対する考え方は、基本的には「足し算」といいでしょう。そのときによって、技法であったり、素材であったり、加工であったりしますが、それらをどんどん足していく。たとえば陶器なら、技法を凝らしてかたちを整え、ふんだんに色の素材を使って柄を描き、さらに加工をほどこして作品をつくりあげる……という手法をとるわけです。

【ア】

一方、日本は「引き算」。茶器などでも、いったんつくりあげたかたちから、そぎ落とし、そぎ落とし、「もう、これ以上そぎ落としたり茶器として成り立たない」というところまで「引いて」いくのです。

【イ】

陶器でいえば、西洋ではかたちが左右対称だったり、描いた柄に寸分の狂いもないものが美しいとされる。

ところが、一方で、茶道で使われる茶碗を見てみてください。日本ではかたちがいびつだったり、柄に統一性がないものを美しいとします。その「不完全さ」に、つくり手の思いや人間性を汲みとり、不完全であるところに素材の力や味わいを感じとるのです。

①これは禅の考え方のものだといっています。禅にはいくらか修行を積んでも終わりということがありません。ここまで修行したら完全だ、これでもう修行は完成された……ということがないのです。完全でないから、不完全だから、修行はどこまでもかぎりなく続きます。であるからこそ、そこに、もつと高みを求めて自分を究めていく、無限の可能性を見出すのです。

禅語に「百尺竿頭進一步」(百尺竿頭に一步を進む)というものがあります。これは長年の修行で会得した境地に安住することなく、さらに高みに向けて修行を続けていくことの大事さを意味しています。日本の美もこれとまったく同様の考え方をするので、

【I】 完全なもの、完成されたものの美しさは、いってみればそこが終結点です。誰が見ても、「ああ、美しい」という受けとめ方をします。

【ウ】

一方、「完全」を超えた「不完全なもの」の美しさには、見る人の想像力を掻き立てる余地があります。

「なぜ、作者はここをいびつなままにしたのだろう？　そこにどんな気持ちを込めたのだろう？」と、想像がさまざまに広がります。

【エ】

【II】 窯で陶器を焼くときに、焦げ跡が陶器に焼きつくことがあります。その焦げ跡を「景色絵」として楽しむ、というのも、日本の陶器ならではの、つくり手の意図どおりではない、偶然生まれたその柄にさえ、日本人は意味を見出すのです。しかも、美しいものは残し、美しくないものは完成されていても割ってしまう。②美しさの正解は、非常にあいまいなものにもかかわらず……。

見る人の数だけ美しさがある、といっているでしょう。A、作者の真の意図がどこにあったかはわかりません。でもそれは、それぞれが感じたままでもいいのです。

感じることで作品と一体になれる。そこが大事なところです。一体になれるということは、作者の世界観を共有できることでもあるからです。

どんなに時代が隔たっていても、時空を超えて、作品ばかりではなく、作者とも触れ合える。完全を超えた不完全な、日本の美だけが持つ不思議さです。

【III】 絵画にも、西洋的なものと日本的なものでは根本的なちがいがあると思います。

西洋の油絵と日本の墨絵を比べると、そのちがいは明らか。

油絵は、デッサンをしてきちんと構図を決め、そこに絵の具を載せていきます。絵の具は何度でも塗り重ねられる。作者は自分が納得するまで絵の具を重ね、「これでよし」というときに絵画は完成するわけです。

一方、墨絵の場合、③。といって、描くのに時間がかかっていないわけではない。時間をかけて墨をすりながら、描きたいテーマや構図、筆致などを自分の頭のなかで練りに練るからです。そして、ひとたび筆を執ったら、ほとんど一気に描き上げる。描き出されるのは、そのとき、その瞬間の自分自身です。わかりにくい言い方かもしれませんが、すべての自分がそこに投入されているのです。露わな自分が墨絵として表現されている、といってもいいでしょう。

ですから、絵柄も、構図も、墨の濃淡も、そのときかぎりのもので、二度と同じものが描かれることはありません。なぜなら、そのとき、その瞬間の自分は、次の瞬間には移ろい、変化しているからです。油絵のように筆を何度も入れ直して作品を完成させるということもない。

Ⅳ もちろん、時間をかけて描かれる複雑な構図や細密な絵柄の作品もありますが、^④ 基本的な姿勢は同じです。風景でも人物でも、その一つひとつの筆運びは、後戻りできないその瞬間の、自分のまるごとの投入、投影なのです。

禅の研究者で、禅文化を広く海外に広めた鈴木大拙さんの言葉にこんなものがあります。

「生命は、時という画布の上に、みずからを描く。そして、時は、けつしてくりかえさない。ひとたび過ぎゆけば、永遠に過ぎ去る。行為もまた同様である。ひとたびおこなえば、おこなわれる以前にはけつして戻らない。生命は『墨絵』である。ためらうことなく、知性を働かせることなく、ただ一度かぎりで描かねばならぬ」

生命に重ね合わせることによって、墨絵の何たるかを、その本質を射貫いた至言でしょう。

Ⅴ 墨絵は、いうまでもなく、墨の濃淡だけで描かれ、色彩はありません。

B、次のような表現があるのを知っていますか。

「墨に五彩あり」

五彩とはたぐさんの色ということです。つまり、^⑤ 墨は、その濃淡で無限大に広がる「色」を描くことができる、ということです。もつといえ、[絵の具をもつてしてもあらわせない色でも表現できるのが墨だ]ということでしょう。

色を感じとるのは、見る人の想像力です。よく知られている禅画に、六つの柿が墨で描かれたものがあります。六つの柿の一つひとつの風合いがちがつている。どの柿がどのくらい熟れているのか、あるいは、まだ、熟していないのが、墨一色のその絵で、みごとに見る人の心に届くのです。

もちろん、色彩を使えば、もつと直接的に描き分けられるでしょう。しかし、それでは想像力を喚起しない。赤く彩色されていれば、「熟れているな」と感じるでしょうし、緑がかった色なら、「まだ、熟れていない」という感じ方を誰もが同じようにするわけです。

ところが、墨の濃淡だけで描かれた柿は、見る人ごとにちがった色を感じさせます。ある人が美しい橙色を見たひとつの柿に、

別の人は赤を見るかもしれませんし、緑を感じるかもしれないのです。

C、橙色も人それぞれで、淡い橙色であったり、深みのあるそれだったりするわけです。まさに、一色の墨が無限の色を伝えるのです。

こんな奇跡のようなことを、当たり前にしてきたのが、禅の心、日本の心なのです。

「見る人の想像力にゆだねられる部分をあえて残す」というのも日本文化の特徴といえるでしょう。しかし、実はこれは、怖い文化でもあります。なぜなら、言葉を換えれば、見る人の力量が問われるということにほかなりませんから……。

Ⅵ 書になると、いつそうそのことがはつきります。

禅では書のことを「墨跡」といいますが、そこにあらわれているのは、書かれた文字だけではありません。目には見えない作者の空間的な筆の動きも、その文字からは伝わってきます。

どのような筆の動きで、ひとつの「点」が打たれたのか、「はらい」や「はね」が書かれたのか、見る人は想像力をはたらかせます。また、何も書かれていない白の部分も墨跡の一部です。そうしたものの一切合切を含めて「墨跡」という作品は成立しているのです。

^⑥ 見えないもので見ていく。日本文化へのアプローチとして欠かせないのがその心がまえです。

(杵野俊明『日本人はなぜ美しいのか』による。問題作成にあたり、一部を改変しました。)

* 禅は仏教の宗派の一つ。姿勢を正して座り精神を統一する「座禅」という修行によって悟りを得ようとする。

* 百尺竿頭は百尺(約三十メートル)もある竿の先端のことで、ここでは「到達できる最高の境地」のたとえ。

* 筆致は絵や文字などの筆づかいのおもむき。

* 画布は油絵を描くための布。カンバス。

* 至言は真理・真実をきわめて適切に言い当てた言葉。

問一

A

C

にあてはまる言葉として適切なものを、次のア～カから一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア なぜなら

イ しかし

ウ もちろん

エ たとえば

オ さらに

カ すると

問二

次の段落は本文中のどの位置に入りますか。【ア】～【エ】から選び、記号で答えなさい。

両者の決定的なちがいは、西洋の美が「完全なる美」「完成された美」であるのに対して、日本の美は「不完全なる美」、さらにいうならば、「完全を超えた不完全なる美」であることです。

問三

この文章を大きく三つに分けると、次の各問いに答えなさい。

(1) 第二、第三の部分はどこから始まりますか。本文中の【Ⅰ】～【Ⅵ】から選び、記号で答えなさい。

(2) 第二の部分に小見出しをつける場合、どのようなものがよいですか。適切なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 日本の美だけが持つ不思議さ

イ 墨一色で、世界は無限に広がる

ウ 「不完全なもの」の美しさ

エ 墨跡を通して、見えないものまで見ていく

オ 「その瞬間」を描く墨絵

問四

線部①「これは禅の考え方そのものだといっているでしょう」とありますが、「不完全さ」を大事にするこの考え方によって得られるものは何ですか。本文中から二十字以上二十五字以内でぬき出して書きなさい。

問五

線部②「美しさの正解」は、非常にあいまいなものにもかかわらず……」とありますが、「あいまいなもの」になっ

てしまうのはなぜですか。適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 日本の陶器の美しさは、具体的な人々を超えたところに感じられるものであるから。

イ 日本の陶器の美しさは、美しさに対する普遍的な価値観を否定して成り立つものであるから。

ウ 日本の陶器の美しさは、見る人それぞれが実物と関わりなく自由^{みづか}に想像するものであるから。

エ 日本の陶器の美しさは、作者の意図とは関係なく偶然によってしか生まれないものであるから。

問六

③

にあてはまる文として適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 実際に作品をどのように描くかを決めるまでの時間はごく長いものです

イ 実際に墨をすって筆で描きはじめるまでの時間はごく長いものです

ウ 実際に納得できる作品を描き上げるまでの時間はごく短いものです

エ 実際に紙に筆を置いてから描き上げるまでの時間はごく短いものです

問七

線部④「基本的な姿勢」について、次の各問いに答えなさい。

(1) 何を描くための「姿勢」ですか。本文中から十二字でぬき出して書きなさい。

(2) どのように描くことを言っていますか。本文中から二十五字以内で探し、はじめの五字をぬき出して書きなさい。

問八

線部⑤「墨は、その濃淡で無限大に広がる『色』を描くことができる」とありますが、なぜですか。本文中の表現を使って三十文字程度で答えなさい。

問九 ――線部⑥「見えないもの」とありますが、この文章で、日本の美の中の「見えないもの」に含まれないものを、次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 不完全さ イ 素材の力や味わい ウ 作者の世界観 エ 無限の色 オ 筆の動き

問十 本文で説明されていることに合っているものを、次のア～オから二つ選び、記号で答えなさい。

ア 日本の美と西洋の美は対照的なものである。誰が見ても美しいものを追求する西洋の美に対して、必ずしも美しいものを目指そうとしないのが日本の美である。

イ 日本の美は、作者の意図だけで成立するものではない。見る人がそれぞれに美を感じることが重要で、そのことによって見る人と作者との共感が可能になる。

ウ 西洋の美には、「そのときかぎりのもので後戻りできない」という日本の美の発想が欠けている。そのため、西洋人が日本美術の美しさを本当の意味で感じとることは難しい。

エ 日本の美に対する姿勢は禅の修行と重なる部分を持っている。日本の美を追求するためには、禅の修行と同じ姿勢で、常に新たな技術を身につける努力を続けなければならない。

オ 日本の美の本質にあるものは禅の心と同じものである。日本の美と禅の心について考えることは、そのまま日本文化と日本の心について考えることにつながる。

三 次の文章を読んで、あとの各問いに答えなさい。問いの中で字数に指定のあるときは、特に指示がないかぎり、句読点や符号もその字数に含めます。

夕食のあいだじゅう、恭介はきげんが悪かった。きげんの悪い時、恭介はいつも思う。僕はジャングルに住みたい。

「もうすぐ、卒業式ね」

すきやきのなべにお砂糖をたしながら、お母さんが言った。

「そうしたら、恭介も中学生か」

お父さんが言った。

「まだだよ。まだ二月だから小学生だよ」

「でも、もうすぐじゃないか。入学手続きだうてすませたんだろ」

「うん」

恭介は①ぶつちようづらのまま、しらたきを口いっぱいにはおぼった。

今朝、学校に行ったら、女の子たちがサイン帖をまわしていた。もうすぐおわかれだね、とか、さみしいね、とか、そんなことばかり話していた。ひとりが、恭介のところにもサイン帖を持ってきた。

「俺、書かないよ」

「どうして」

「だって、さみしくねえもん」

女の子はきまり悪そうにそこに立っていた。

「何だよ。書きたくないんだからいいだろ」

「もういいわよ。暮林くんになんかたのまない」

女の子はサイン帖をかかえたまま、小走りで自分の席にもどった。みんなの視線が恭介にあつまる。

「ちえっ、何だよ」

恭介はどすんと席にすわった。机の上に、一時間めの教科書と、ノートと、ふでばこをだす。ちえつ、あいつも見ていた。ななめ前の方から、暮林くんのいじわる、という顔をして、恭介を見ていた。一時間めは算数だった。担任の大島は男らしくない、と恭介は思う。たとえば今日だって、

「問五、暮林くん、やってみてくれるかな」
なんて言う。

「問五、暮林やれ」
がふつうだと思ふ。恭介は立ちあがった。

「わかりませーん」

と言う。算数はきらいじゃないけれど、^②今朝はなんとなくいやな気分だったし、わかりません、と言えは先生が自分でやってくれることがわかっていた。

「わからないのかあ。問四の応用なんだけどなあ」

先生は頭をかきながら、黒板に問題をといてみた。

「これは基礎だからね。これがわからないと中学に行つて苦労するぞ」

給食は、あげパンと、とん汁と、牛乳とみかんだった。恭介は給食当番で、かつぼう着を着て給食をとりに行く。

^③「やった。とん汁だ」

恭介は、今までとん汁の日に給食当番になったことが一度もなかった。教室のうしろに立つて、一人一人の器にとん汁をつぐ。みんなステンレスのお盆を持つて一列にならぶ。あと三人、あと二人、あと一人。恭介はドキドキした。あいつの番だ。

「少しにして」

あいつが言う。恭介は、なるべく豚肉の多そうところを、じゃばつと勢いよくつぐ。

I

とつがれたとん汁をみて、あ

つはまゆをしかめた。

「少しにして言つたでしょ」

「せんせーつ、野村さんが好き嫌います」

恭介が声をはりあげると、大島先生はまのぬけた声でこたえる。

「それはよくないなあ。野村さん、がんばつて食べてごらん」

野村さんは、大きな目できゅつと、恭介をにらみつけた。

お母さんが、恭介のちゃわんに、くたくたに煮えたすきやきのにんじんを入れた。

「好き嫌いしてると背がのびないわよ」

実際、恭介は背が低かった。野村さんは女子の中でまん中より少し小さく、その野村さんとならんで、ほとんどおなじくらいだった。

「もういらないよ。ごちそうさまっ」

恭介ははしをおいて、二階にあがった。部屋に入るとベッドの上に大の字に横になる。野村さんの顔がうかんでくる。動物でいうならバンビだ、と恭介は思う。三年生の時にはじめていっしょのクラスになって、四年生は別々で、五年生、六年生とまたいっしょになった。野村さんについて恭介が知っていることといえば、保健委員で、とん汁が嫌いで、女子にしては足がはやい、ことくらいだった。今朝^④あんなことがあつたから、今日は一日、誰も恭介にサイン帖を持つてこなかった。もちろん野村さんもだ。恭介はベッドからおりて、机のひきだしをあけた。青い表紙のサイン帖が入っている。^⑤ちえつ、恭介はひきだしをしめて、もう一度ベッドに横になった。

中学にいったら生活がかわるだろうなあ、と恭介は思った。勉強だつてしなくちゃいけないし、先生だつて大島みたいなものきなやつじゃないにきまつている。野球とか基地ごっこばかりをやっているわけにはいなくなる。クラスのみんなもばらばらになつてしまう。あいつなんか私立にいつてしまうから、なおさら会えない。あーあ。ジャングルに住みたい。

ジャングルに住んだら、と恭介は考える。勉強もない、家もない、洋服も着ない。穴をほつてその中で暮らそう。ライオンとゴリラを飼おう。狩りをして、その獲物を食べればいい。皮をはいで毛布にしよう。となりのほら穴にあいつが住んでいて、僕があいつの分も狩りをしてやる。僕とあいつのほかには人間は誰もいなくて、猿とか、へびとか、しまうまとか、^⑥ベットつぽくない動物だけが住んでるといい。

恭介が大島先生に呼びだされたのは、次の日の放課後だった。職員室はストープがききすぎていてあつい。大島先生は今まで生徒を呼びだしたことなど一度もなかったので、恭介は少しドキドキした。

「わざわざ呼びだしたりして悪かったね」

先生が言った。

「何の用だと思う」

「わかりません」

「そうだよな。ずいぶん前のことだし」

「はあ」

「去年の春に、遠足に行ったら。あのとき買い食いしたのは暮林くんだけじゃないって、わかってたんだ。代表でおこられてもらったんだよ。すまなかったね」

「はあ」

「話はそれだけだ。もうじき卒業だから、きちんとっておきたくてね。じゃ、気をつけて帰れよ」

「……はい」

「……はい」^⑦ へんなやつ。恭介は下駄箱でくつをはきかえながら、まだ心臓がドキドキしていた。もちろん、遠足のときのことは恭介もよくおぼえていた。

僕と、高橋と、清水と、それから三組のやつらも何人かいつしよに、アイスクリームを買い食いついた。集合の時、僕だけがおこられた。——でも、そんな昔のこともいいよ。教師がやまると、気持ちわるい。ちえつ、大島ともあと一カ月のつきあいだと思うと

Ⅱ

する。

大島先生の言葉や態度は、いつも恭介をイライラさせる。すまなかったね、なんて。もうじき卒業だから、なんて。

「あれ」

下駄箱の奥に、白い表紙のノートが入っている。サイン帖だった。

「誰のだろう」

Ⅲ

とページをめくり、恭介はびくんとして手をとめた。あいつのだ。あいつのサイン帖だ。どのページもみんな、なみちやんへ、で始まっている。なみちちゃんというのは野村さんの名前だった。^⑧ 恭介は、すのこをがたがたとけて校庭にとびだした。冬の透明な空気の中を、思いきり走る。かばんがかたかた鳴る。

家にとびこんで、ただいま、と一声になると、恭介は階段をかけあがり、自分の部屋に入った。かばんの中からサイン帖をだす。

野村さんのサイン帖。一ページずつ、たんねんに読む。おなじような言葉ばかりが並んでいた。卒業、思い出、別れ、未来。

「^⑨ おもしろくもないや」

声にだしてそう言って、恭介はノートを机の上にぽんとほうった。

その日はそのあとずっと、サイン帖のことが頭をはなれなかった。夕食のあいだも、おふろのあいだも、テレビをみているあいだも、恭介は頭のどこかでサイン帖のことを考えていた。みんなの前で、僕は書かないよって言ったんだ。書けるわけがないじゃないか。それなのにこっそり下駄箱に入れるなんて、絶対、書いてなんかやるもんか。恭介はいつもより少し早く、自分の部屋にひきあげた。

ドアをあけると、机の上の白いノートがまっさきに目にとびこんでくる。あーあ。やっぱり僕はジャングルに住みたい。ジャングルには卒業なんてないもん。そりゃあ、中学にいけばいいこともあるかもしれない。あいつよりかわいい子がいて、大島よりほんやりした教師がいるかもしれない。でも、それはあいつじゃないし、大島じゃない。僕だって、今の僕ではなくなってしまうかもしれない。恭介は机の前にすわり、青いサインペンで、ノートに大きくこう書いた。

野村さんへ。

^⑩ 俺たちに明日はない。暮林恭介

いつか観た映画の題名は、そっくりそのまま今の恭介の気持ちだった。

次の日、恭介がサイン帖をわたすと、野村さんは、

「ありがとう」

と言つてにっこり笑つた。机のひきだしにしまつてある自分のサイン帖のことが、恭介の頭をかすめた。あいつの下駄箱に入れておいたら、あいつは何て書いてくれるだろう。女の子だから、やっぱり思い出とか、お別れとか、書くんだろうか。恭介は、首のあたりがくすぐったいような気がした。教室の中は、ガラスごしの日ざしがあかるい。

「おはよう。みんないるかあ」

教室に入つてきた大島先生が、いつものようにまのぬけた声で言う。もう三月が始まつていた。

(江國香織『つめたいよるに』による。問題作成にあたり、一部を改変しました。)

問一——線部①「ぶつちようづらのまま」とありますが、恭介はなぜ「ぶつちようづら」だったのですか。適切なものを次の

ア、エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 家でも学校でも恭介の複雑な思いにかまわず、みんなが卒業のことを話題にするから。

イ 母親がすきやきを甘めに味付けしていることに、子ども扱いされていると感じたから。

ウ いくら望んでも、ジャングルに住むことが不可能であることが分かりきっていたから。

エ まだ小学生であると言っているのに、それを否定するかのようない方をされたから。

問二——線部②「今朝はなんとなくいやな気分だった」とありますが、「いやな気分」になつた最も大きな原因はどのようなことですか。三十字以上三十五字以内で書きなさい。

問三——線部③「やった。とん汁だ」とありますが、なぜ「やった」と思つたのですか。適切なものを次のア、エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 大好きなとん汁が出た日の給食当番だったので、自分のとん汁を多くつくことができと思つたから。

イ 給食当番の今日は、とん汁が嫌いな「あいつ」に、わざとたくさんのとん汁をつぐことができるから。

ウ みんなが好きなとん汁を担当することは何となく誇らしく、今日初めてその機会がめぐってきたから。

エ とん汁とあげパンの組み合わせはおいしく、卒業を前にこれらが食べられることを嬉しく感じたから。

問四——

I	III
---	-----

にあてはまる言葉として適切なものを、次のア、エから一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア ばらばら イ うきうき ウ とうとう エ ひらひら オ むかむか

カ なみなみ キ せいせい ク ひたひた ケ すらすら

問五——線部④「あんなこと」とはどのようなことですか。三十字以上三十五字以内で書きなさい。

問六——線部⑤「ちえつ」とありますが、ここにはどのような気持ちが込められていますか。適切なものを次のア、エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 言葉を書く気持ちなどないのに、青い表紙のサイン帖の受け取りを断れず後悔している気持ち。

イ サイン帖に言葉を書くつもりはないとはいえ、誰も自分の所に来てくれずさびしい気持ち。

ウ 野村さんのサイン帖になら言葉を書く用意があつたのに、持ってきてもらえず残念な気持ち。

エ 自分もサイン帖を用意してみたものの、どう扱つてよいか分からず戸惑っている気持ち。

問七 — 線部⑥「ペ、ッ、つばく、ない、動物だけが住んでるといい」とありますが、なぜそう思うのですか。適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 犬や猫などは人間社会の日常生活を思い出させ、せつかくのジャングル生活を台無しにするから。
イ あまりなじみのない変わった動物がいた方が、「あいつ」の関心を引くことができると思うから。
ウ 猿、へび、しまうまなど、普段接することのない動物に興味があり、よく観察してみたいから。
エ ジャングルに住むのなら、ジャングルらしい動物が身近にいた方が気持ち盛り上がるから。

問八 — 線部⑦「へんなやつ」とありますが、なぜそう思うのですか。二十字以上二十五字以内で書きなさい。

問九 — 線部⑧「恭介は、すのこをがたがたとけつて校庭にとびだした。冬の透明な空気の中を、思いきり走る」とありますが、このときの恭介の様子として適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア みんなの前で書かないと言ったにもかかわらず、それでもサイン帖を下駄箱に入れた野村さんに怒りがこみ上げている様子。
イ みんなの前で書かないと言ってしまったので、他人のサイン帖を手にしているのを誰かに見られないかとあせっている様子。
ウ 気になっている野村さんのサイン帖を手にして、動揺するとともに嬉しさと緊張で他のことが目に入らなくなっている様子。
エ 気になっている野村さんのサイン帖を持っていると、誰かに自分の気持ちを知られそうな気がして落ち着けないでいる様子。

問十 — 線部⑨「おもしろくもないや」とありますが、なぜこのように思ったのですか。適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 野村さんに関する秘密が書かれているのを期待したが、そのようなことは書かれていなかったから。
イ 渡し方から考えて、自分に対する告白の言葉が記されていると思ったが、書かれていなかったから。
ウ 卒業に関するまじめなものばかりで、冗談や気の利いたおもしろいことが書かれていなかったから。
エ 卒業によって変化する様々なことを、自分と同等に実感できている内容が書かれていなかったから。

問十一 — 線部⑩「俺たちに明日はない」とありますが、これはどういう意味ですか。適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 環境の悪化が進む時代を生きて行く自分たちには、明るい未来はないという意味。
イ 卒業してしまったらお互い今までの自分ではなく、新しい自分になってしまうという意味。
ウ 卒業して中学生になると、たくさんの困難が待ちかまえているのだという意味。
エ このような子どもじみたことをしては、りっぱな中学生にはなれないという意味。

問十二 恭介について説明したものとして適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア はじめは野村さんのことが嫌いだったが、卒業を目前にして好意を持つようになった。
イ 卒業を目前にして抱いた複雑な思ひは、全く変化することなく三月を迎えることになった。
ウ 本心をうまく表現できない幼さと、卒業の意味を深く考える大人っぽさとが入り交じっている。
エ 大島先生には嫌悪感しか抱いていないが、野村さんには密かに好意を抱いている。

問五	問二	問一	
	①	⑥	①
		⑦	②
	問六		
	②		
		ば	
	問三	⑧	③
問七			
		って	
問八	問四	⑨	④
	①		
	②		しい
		⑩	⑤

[illegible][illegible]